

## 題目 「日本語の形容詞 連用形の名詞的用法について」

### 要旨

日本語の形容詞の連用形のうち「遠く・近く・多く・古く・早く」等は、名詞的に使用されることがある。本論文では、先行研究として Larson & Yamakido(2001)の分析を参照し、このような形容詞の用法を支える制約について考察してゆく。Larson & Yamakido(2001)では、このように用いられる形容詞は、「時間・距離」に係るものであるとの見解を示しているが、それらの中で容認可能・不可能な意味的に対となる形容詞、例えば、「古く・若く」などの差異に対しては深い考察がなされていない。これらについても同参考文献からの研究をもとにして更なる考察を深めるものとする。

### 0. はじめに

我々は日常、形容詞に属する言葉を名詞的に用いることがある。それらの形容詞は連用形であることに限定され、さらに「時間・距離」の概念に関する形容詞であるという特徴を持っていることが確認されている。本研究では従来の研究を足がかりとして、それらの形容詞のより細かな分析を行い、より正確な構造を解明し、細かな分類をおこなっていききたい。このような研究をするにあたっての出発点となったのは、対となる形容詞、「古い・若い」や「深い・浅い」などを連用形として、名詞的に用いようとしたときに容認可能性が分かれるということに対する疑問である。先行研究とする Larson & Yamakido(2001)では、このような形容詞のうち容認可能なものに焦点を合わせ、主にその用法を成立させている制約・条件についての考察はなされているが、容認不可となる形容詞についてはどのような条件によって容認不可となるのか、ということについての考察は試みられていない。そこで、本研究では Larson & Yamakido(2001)で行われた分析をもとに、これらの形容詞に関する分析を深め、新たな条件・制約を提示することによって、より詳細な見解を示していければと考えている。

## 1. 形容詞連用形の名詞化の構造

### 1.1. 名詞化される形容詞の条件

Larson & Yamakido(2001)では、名詞化される形容詞の基本条件を(1)のように提示している。

- (1) a. 連用形の「-く」構造であること
- b. 省略された名詞の直前に位置すること
- c. 時間と空間に関するものであること

(1)の条件を加味したうえで、次の例文(2)を見てみることにする。(2)では形容詞「遠い」は時間・空間に関する形容詞であり、「-く」構造をとったとき{場所}という名詞の省略が認知可能となっている。一方(3)では形容詞「赤い」は時間・空間に関する形容詞ではなく、{色}という名詞の省略は認知不可能である。また(2)(3)のどちらも「-い」構造での直後の名詞の省略は容認不可能となっている。

- (2) a. 花子が遠くに行った。
- b. 花子が遠い{場所}に行った。
- c. \*花子が遠いに行った。
- (3) a. \*壁を赤くに塗った。
- b. 壁を赤い{色}に塗った。
- c. \*壁を赤いに塗った。

さらに、「-く」構造の形容詞の後置詞も「へ」「から」「に」「まで」のように時間・空間に関連したものである必要があるという。これらは(4)でみるように明らかである。

- (4) a. 花子が遠くへ行った。
- b. その手紙が遠くから来た。
- c. 太郎が駅の近くに住んでいる。
- d. 太郎が早くから遅くまで働いていた。

加えて(5)のように「-く」構造の形容詞は一般的には主語、目的語、所有格、後置詞の目的語にはなることができない。

- (5) a. \*古くが蘇った。 (主語)  
 b. \*花子が高くを片付けた。 (目的語)  
 c. \*太郎が早くのミーティングへ行っった。 (所有格)  
 d. \*太郎が古くについて話した。 (後置詞の目的語)

## 1.2. 形容詞の名詞化についての仮説

Larson & Yamakido(2001)では、これらの分析から形容詞の省略について「名詞化」と「省略」という二つの仮説を立てた。「名詞化」の仮説は「-く」という連用形の活用語尾を名詞化の働きを為す形態素とするものであり、一方「省略」の仮説は時間・空間に関する名詞の省略であるとするものである。

- (6) a. 名詞化の仮説  
 [Aとお] → [N [Aとお] -く]  
 b. 省略の仮説  
 [NP [APとおい] 場所] → [NP [APとおく] φ]

しかし、「名詞化」の仮説では(5)のような事象を説明することができないため、Larson & Yamakido(2001)は、省略の仮説からの分析を深めている。

### 1.2.1. 時間と空間に関する代名詞

Larson & Yamakido(2001)はまず、省略のプロセスを分析するために Murasugi(1991)の話題化の制約に着目した。それらは(7)のように場所や時間に関する修飾語は話題化を受けるといものである。また理由や手段などに関する修飾語は(8)のように話題化を受けることができない。

- (7) a. その教室はマリが試験を受けた。 (場所)  
 b. その日はマリが試験を受けた。 (時間)  
 (8) a. \*その理由はマリがクビになった。 (理由)  
 b. \*その方法はマリが定理を証明した。 (手段)

ここで Murasugi(1991)は話題化はφ代名詞(*pro*)を含む転移を想定し、(7)(8)の対比によって日本語には場所と時間に関する *pro* が存在するという結論を導き出している。この *pro* を省略のプロセスに組み込むと次のような構造が導かれる。

- (9) a. [NP [APとおく] *pro*LOC]  
 b. [PP [DPあの場所 [NPとおく *pro*] ] -から]

### 1.2.2. Licensing *pro*LOC/TEMP

さらに Rizzi(1986)の分析から *pro* は2つの licensing の制約を受けることが分かっている。それは *pro* 自体がその存在を示す formal licenser をもっていることと、その内容を示す material licenser をもっているということである。また、「-く」構造は一致句 (AgrP) を構成する。

- (10) a. この伝説は古くからある。  
 b. [DP [AgrP [APふる] -く *pro*] ]  
 [ ] FORMAL LICENSING

(10)を見てわかるように、「-く」構造の直後に *pro* が来なくてはいけないということが、*pro* が「-く」によって FORMAL LICENSING されているためであると考えれば、適切な構造であるということが証明できる。

- (11) a. この伝説は古くからある。  
 b. [PP [DP [AgrP [APふる] -く *pro*] ] -から]  
 [ ] MATERIAL LICENSING

(11)において、「-から」は material licenser であり、*pro* を MATERIAL LICENSING していると仮定している。このことの原因を決定づける例として次の(12)があげられる。

- (12) a. 太郎が [DPふる-い 時代] -を 振り返った。  
 b. \*太郎が [DPふる-く *pro*TEMP] -を 振り返った。

(12)a.では、*pro* の場所に時間に関する形容詞が取って代わることができる。一方で b. の「-く」の形は容認不可となる。「-く」という活用語尾と形容詞そのものによって licensing が為されていたとすれば、DP 内で licensing が完結されているはずであり、b. が容認不可となることが説明できないのである。しかし、(11)の構造では、日本語以外の言語でのパターンとして、名詞的な要素を持つものが *pro* を licensing するという構造にはなっていない。名詞的要素を持たない P からの licensing が為されているという矛盾が生じてしまっているのである。そこで、Larson & Yamakido(2001)は Watanabe(1993)

の分析による LP の考察を元に次のような構造を導き出した。

(13) [PP [LP [DP [AgrP [AP ふる] -く *pro*] ] LOCATION OF] -から]

LP は名詞的な要素を持っているため、Watanabe(1993)での分析が間違っていないとすれば、これによって形容詞が名詞的に使われる際の構造が明らかになったといえる。

## 2. 例外

上述してきた制約などでは説明することのできない形容詞が日本語にはいくつか存在する。まずそのひとつとして形容詞「多く」が挙げられる。それは下記の例を見ることで理解できる。

- (14) a. 労働者の多くから不満が寄せられた。  
b. 議長が出席者の多くに意見を求めた。  
c. 参加者の多くが日射病で倒れた。  
d. 多くの銀行で強盗事件が発生した。

(14)で見ると「多い」の連用形「多く」は後置詞に時間・空間に関する「へ」「から」「に」「まで」以外のものもとることができ、主語や目的語、所有格になることができ、なおかつ、それ自体人の多さなどの「程度」や「量」を表すなどの面で、制約に反している。これは他の形容詞で起こっている現象とは根本的に異なる現象が関係していることの現れである。また、これと同じように制約を破る形容詞として、「遠い」と「近い」も挙げることができる。

- (15) a. 家の近くで事故が起こる。  
b. 学校の近くからバスに乗る。  
c. 高台から遠くを見る。  
d. 家から遠くへ行く。

## 3. さまざまな形容詞に対する分析

### 3.1 形容詞による容認可能性の差異

先行研究では、上述してきたように形容詞の名詞的な用法の構造が重点的に分析され

た。が、たとえ時間や空間に関係する形容詞であっても、すべてが容認可能となるようには思われない。時間・空間に関する形容詞で、対応する意味を持つものに容認可能性の差異が生じることが確認できる。

- (16) a. 太郎がかなり深くまで潜った。  
b. ?その船は結構浅くに沈んでいた。  
c. 太郎がかなり高くまで跳んだ。  
d. ?花子は小さいので、低くからジャンプしてよかった。  
e. この伝説は古くから伝えられている。  
f. ?太郎は若くに亡くなった。  
g. 太郎が幼くより才優れていた。

(16a.b.) では、「深い／浅い」という、対応する意味を持ち、尚且つ空間に関する形容詞のペアで名詞的用法を用いた場合に、どちらも容認可能であるとは言い難い。ここで生じる容認可能性の差を再分析する必要がある。

「深く／浅く」という名詞的用法がなぜ容認可能性において差異を生じるのか。まず、(16a.b.) におけるそれぞれの用法を(13)で導かれた構造に当てはめると次のようになる。

- (17) a. [PP [LP [DP [AgrP [AP ふか] -く *pro*] ] LOCATION OF] -まで]  
b. [PP [LP [DP [AgrP [AP あさ] -く *pro*] ] LOCATION OF] -に]

(17)においてももし licensing が適切になされているならば、(16 b.) の容認可能性を低くするような要因は認められない。その原因として考えられるのは、licensing を損なう要素が(16b) に存在するのではないかということである。それは次の例文から推測することができる。

- (18) a. 太郎がかなり深いところまで潜った。  
b. その船は結構浅いところに沈んでいた。

(18)は(14a,b) の形容詞を基本形にし、*pro* の位置に本来存在する名詞を補ったときにできる文であるが、このとき容認可能性の差異は生じていない。(14 b.) と(17 b.) の違いは licensing の有無であるが、このときここでの疑問に対する考えとして licensing を適切に行わせない要素がこの構造に影響を及ぼしているのではないか、ということである。この licensing の妨害が行われていると仮定して、その妨害が先行研究によって分析された PP 内で行われているのか、それとも PP 外で行われているのか。ここで簡潔に考えれば次の三つの考えを仮説として挙げることができる。

- (19) a. 形容詞語幹による PP 内での licensing 阻害  
 b. 形容詞の後置詞による PP 内での licensing 阻害  
 c. PP 外からの licensing 阻害

(19)の三つの仮説については今だ分析が進んでおらず、今後さらに検証と再考が必要である。

### 3.2 時間・空間に関する形容詞の連用形は本当に名詞的に使えるのか

これまでは Larson & Yamakido(2001)までに行われた形容詞連用形の名詞的用法の構造の分析に基づいて、考察を進めてきた。しかし、3.1 までに見られたように、Larson & Yamakido(2001)からはこの用法に対する適切な分析がなされているとは言い難い。導かれた統語構造に、さまざまな時間・空間に関する形容詞を当てはめた場合、構造に即している場合であっても容認可能性が明確に区別できるには至っていないのである。

では、時間・空間に関する形容詞の連用形が「へ」「から」「に」「まで」のような、後置詞を伴ったときに、本当に名詞的に使用することができるのであろうか。3.1 で見たような形容詞による容認可能性の差異はどのくらいの頻度で現れているのであろうか。次にあげる例は、それぞれ「時間に関する形容詞」「空間に関する形容詞」の連用形について、同じく時間・空間に関する形容詞「へ」「から」「に」「まで」が続いた場合の例文と、その例文の容認可能性を記号によって表している。また、例文は周辺の文脈によって影響を受けることのないものにした。

#### ○時間に関する形容詞

- (20) a. \*新しくへ移り変わる。  
 b. \*新しくから古くなる。  
 c. \*新しくに変わる。  
 d. \*新しくまで学ぶ。  
 (21) a. \*遅くへ深まる。  
 b. \*遅くから遊ぶ。  
 c. ?遅くになる。  
 d. ?遅くまで続ける。  
 (22) a. \*長くへ延長する。  
 b. \*長くから延長する。  
 c. \*長くにわたる。  
 d. \*長くまで延長する。

- (23) a. \*早くへ起きる。  
 b. ?早くから起きている。  
 c. ?早くに起きる。  
 d. ?早くまで飲み続ける。  
 (24) a. 古くへ遡る。  
 b. 古くからある。  
 c. ?古くに起きる。  
 d. 古くまで遡る。

#### ○空間的広がりに関する形容詞

- (25) a. \*浅くへもぐる。  
 b. \*浅くから浮き上がる。  
 c. \*浅くに沈む。  
 d. \*浅くまでもぐる。  
 (26) a. ?深くへ潜る。  
 b. ?深くから湧き上がる。  
 c. ?深くに沈む。  
 d. 深くまで浸透する。  
 (27) a. \*狭くへ進入する。  
 b. \*狭くからはみだす。  
 c. \*狭くに挟まる。  
 d. \*狭くまで閉める。  
 (28) a. ?\*広くへ伝わる。  
 b. ?\*広くから集める。  
 c. ?\*広くに普及する。  
 d. ?\*広くまで伝えられる。  
 (29) a. 遠くへ向かう。  
 b. 遠くからやってくる。  
 c. 遠くにある。  
 d. 遠くにある。  
 (30) a. 近くへ行く。  
 b. 近くからやってくる。  
 c. 近くにある。  
 d. 近くまで行く。

(20)～(30)をみればわかるように、時間・空間に関する形容詞であっても、その連用形が名詞的に使用できる例は著しく少ない。(ここでの例文で取り上げたもの以外の形容詞は次の表 1.1 および 1.2 を参照)

時間に関する形容詞	連用形	一へ	一から	一に	一まで
青い(新旧・成熟)	青く	*青くへ思いをはせる	*青くから今に至る	*青くに決心する	*青くまで思い返す
浅い(期間)	浅く	*浅くへ経つ	*浅くから経つ	*浅くから時が経つ	*浅くまで経つ
新しい(新旧)	新しく	*新しくへ変わる。	*新しくから古くなる	*新しくに変わる	*新しくまで学ぶ
大きい(新旧・老若)	大きく	*大きくへ育つ	*大きくから働く	*大きくに育つ	*大きくまで育てる
遅い(速度・時期(+良否)・適不適)	遅く	*遅くへ深まる	*遅くから遊ぶ	?遅くなる	?遅くまで続ける
小さい(新旧・老若)	小さく	*小さくへ思いをはせる	*小さくから今に至る	*小さくに決心する	*小さくまで思いをはせる
近い(間隔)	近く	*近くへ時間が経つ	*近くから始める	*近くにしようと思う	*近くまでしない
遠い(間隔)	遠く	*遠くへ思いをはせる	*遠くから始める	*遠くにしておく	*遠くまで思い返す
長い(期間)	長く	*長くへ延長する	*長くから延長する	*長くにわたる	*長くまで延長する
速い(速度)	速く	*速くへスピードを上げる	*速くから減速する	*速くなる	*速くまで走る
早い(速度・時期)	早く	*早くへ起きる	?早くから起きている	?早くに起きる	?早くまで飲み続ける
古い(新旧・期間)	古く	古くへ遡る	古くからある	?古くに起きる	古くまで遡る
短い(期間)	短く	*短くへ時間を削る	*短くから延長する	*短くに削減する	*短くまで時間を削る
緩い(速度・緩急)	緩く	*緩くへスピードを落とす	*緩くから速くなる	*緩くにスピードを落とす	*緩くまで減速する
若い(新旧・老若)	若く	*若くへ伝える	*若くから学ぶ	*若くに決心する	*若くまで知られる
幼く(新旧・老若)	幼く	*幼くへ思いをはせる	?幼くから知っている	*幼くに亡くなる	*幼くまで育てられる

表 1.1

空間的広がりに関する形容詞	連用形	一へ	一から	一に	一まで
浅い(量・深淺)	浅く	*浅くへもぐる	*浅くから浮き上がる	*浅くに沈む	*浅くまでもぐる
厚い(量・厚薄)	厚く	*厚くへ染み込む	*厚くから薄くする	*厚くに挟まる	*厚くまで重ねる
粗い(量・大小+形状)	粗く	*粗くへ削る	*粗くから整える	*粗くに仕上げる	*粗くまで精製する
薄い(量・厚薄)	薄く	*薄くへスライスする	*薄くから増やす	*薄くに仕上げる	*薄くまでスライスする
大きい(量・大小)	大きく	*大きくへ育つ	*大きくから邪魔になりだす	*大きくなる	*大きくまで育てる
かわいい(量・大小)	かわいく	*かわいくへする	*かわいくからそうでなくなる	*かわいくになる	*かわいくまでなる
険しい(傾斜・形状)	険しく	*険しくへ向かう	*険しくから戻ってくる	*険しくになる	*険しくまでたどり着く
細かい(量・大小+形状)	細かく	*細かくへ潰す	*細かくから集まる	*細かくに砕かれる	*細かくまですり潰す
四角い(形状)	四角く	*四角くへ変わる	*四角くから変形する	*四角くに変える	*四角くまで変形させる
鋭い(形状・傾斜)	鋭く	*鋭くへ整える	*鋭くから丸くなる	*鋭くに刺さる	*鋭くまで尖らせる
狭い(量・広狭)	狭く	*狭くへ進入する	*狭くからはみだす	*狭くに挟まる	*狭くまで閉める
高い(量・高低)	高く	?高くへ跳ぶ	?高くから落ちる	?高くに浮かぶ	?高くまで飛び上がる
小さい(量・大小)	小さく	*小さくへ縮む	*小さくから育てる	*小さくなる	*小さくまで潰す
近い(量・遠近)	近く	近くへ行く	近くからやってくる	近くにある	近くまで行く
遠い(量・遠近)	遠く	遠くへ向かう	遠くからやってくる	遠くにある	遠くまで行く
長い(量・長短)	長く	*長くへ伸ばす	*長くから縮める	*長くに伸ばす	*長くまで伸びる
低い(量・高低)	低く	?低くを飛ぶ	?低くから飛び上がる	?低くに漂う	?低くまで下降する
広い(量・広狭)	広く	?広くへ伝わる	?広くから集める	?広くに普及する	?広くまで伝えられる
深い(量・深淺)	深く	?深くへ潜る	深くから湧き上がる	?深くに沈む	深くまで浸透する
丸い(形状)	丸く	*丸くへ整える	*丸くから変形する	*丸くなる	*丸くまで整える
短い(量・長短)	短く	*短くへ切る	*短くから伸びる	*短くなる	*短くまで切る
緩い(傾斜・量・大小)	緩く	*緩くを登る	*緩くから険しくなる	*緩くなる	*緩くまでたどり着く

表 1.2

(20)～(30)および、表 1.1 1.2 で見てきた形容詞のうち、名詞的用法が周囲の文脈と関係なく容認可となるものは「遠い・近い」のようにこれまで例外として扱われてきたもののみである。

しかし、周囲の文脈によってはその他の形容詞も名詞的に使用できることがある。以下にその例を提示する。

### 3.2.1 名詞および名詞句による影響

形容詞が名詞的に用いられる際、形容詞が現れる直前の名詞、または名詞句によって容認可能性が変化するという現象が確認できる。

- (31) a. ?太郎が深くまで潜った。  
b. 太郎が海の底深くまで潜った。
- (32) a. ?飛行機が高くを飛んでいった。  
b. 飛行機が空高くを飛んでいった。
- (33) a. ?花子は遅くに帰ってきた。  
b. 花子は夜遅くに帰ってきた。
- (34) a. \*次郎は早くに目覚めた。  
b. 次郎は朝方早くに目覚めた。
- (35) a. \*稲作が広くに伝えられた。  
b. 稲作がその国の広くに伝えられた。

(31)～(35)の b. において、形容詞の前にそれぞれ「海の底／空／夜／朝方／その国の」といった名詞（および名詞句）が補われており、それによって容認可能性が曖昧、もしくは不可な文章から、容認可能な文章へと変化している。ここから、形容詞連用形が名詞的に用いられる際に、直前に来る名詞が、形容詞に影響を与えているのではないかと推測することができる。

### 3.2.2 前後の文脈による影響

3.2.1 節で見られた、単独の文章の中での形容詞への影響以外にも、形容詞連用形が名詞的に使用されている前後の文脈からの影響もあるのではないかと考えられる。前後の文脈によっては(31)～(35)の a. のような文章も容認可能となる例がある。

- (36) a. 太平洋の西にマリアナ海溝がある。 太郎がその深くに潜った。  
b. 空には雲ひとつなく、飛行機が高くを飛んでいった。  
c. 花子が遅くに帰ってきた。 午前3時をまわっていた。  
d. 朝日もまだ出ておらず、暗い。 次郎は早くに目覚めた。  
e. 稲作が広くに伝えられたのは、その国の気候に適していたからだ。

我々が日常会話で、形容詞連用形の名詞的用法を含んだ文章を発話する際には、(36)の例文のように前後の会話の流れもその意味の認識にかかわってくるといえる。このような時、3.2.1 節のように名詞が形容詞に影響を与えているのと同様に、前後の文脈も形容詞に影響を与えることで容認可能な文章となったのではないかと思われる。また、(36)の例文において下線部以外の文脈の中に「マリアナ海溝／空／午前3時」などといった形容詞の意味の認識にかかわる名詞が含まれていることは前節で述べた名詞が及ぼす影響の延長にあるものように考えられ、(36d)の「朝日もまだ出ておらず、暗い。」のような文脈からは、読み手が「朝早い時間である＝明け方」という認識を導かれやすいため、その後の「早く」という形容詞連用形の名詞的用法が正確になされるのではないだろうか。

### 3.2.3 副詞による影響

名詞以外にも、形容詞の直前に副詞がある場合、容認可能性が上がるという分析が見られる（正阿弥の分析による）。

- (37) a. ?太郎が深くまで潜った。  
b. 太郎がかなり深くまで潜った。
- (38) a. ?飛行機が高くを飛んでいった。  
b. 飛行機がかなり高くを飛んでいった。

## 3.3 例外

Larson & Yamakido(2001)の分析によれば、連用形の名詞的用法を取ることができるのは時間・空間に関する形容詞に限られていたが、それ以外の形容詞でも条件によっては、その連用形が名詞的用法を取ることができる。

### 3.3.1 時間・空間に関する形容詞以外の形容詞の名詞的用法

時間・空間に関係のない「詳しい」や「正しい」などの形容詞も、場合によっては連用

形の名詞的用法を取ることがある。

- (39) a. 詳しくはホームページで。  
b. \*その本に詳しくが載っている。
- (40) a. 正しくは～です。  
b. \*文字が正しくに表示されない場合は～

(39a)は「詳しく」という形容詞を、名詞「詳細」に置き換えても意味は変わらない。一方、(37a)では、形容詞「深く」を置き換えると「深いところ」など、形容詞を含む名詞句となる。このように一部を見るだけでも従来の連用形の名詞的用法とは異なるものであるように見え、別の角度からの分析が必要であると考えられる。

### 3.3.2 副詞の影響

3.3.1 で見たような時間・空間と関わりのない形容詞で、直前に副詞などの要素を伴うと、連用形の名詞的用法をとることがある。

- (41) a. \*鉛筆を細くまで削る。  
b. ?鉛筆をかなり細くまで削る。
- (42) a. \*大根を太くまで育てる。  
b. ?大根をかなり太くまで育てる。

(41b)(42b)では、「かなり」という副詞を形容詞の直前に置くことで、名詞的用法を行っている。しかし、容認可能性が増したとはいえ、日常的に使用しているかと考えると疑問はある。それでも、3.2.3 節でみられた例などとあわせて検証してみる価値はあると考えられる。

## 4 まとめ

これまで Larson & Yamakido(2001)によって考察されてきた、形容詞連用形の名詞的用法について、更なる分析を行ったが、そこで考えられてきた名詞的用法に関する統語構造によっては、今まで見てきたような現象は正確に解明されるものではないと考えられる。単独の文章や単語だけでなく、より広い視野で単語と単語、文と文による相互の影響なども検証してみる必要があるといえるだろう。

### 参考文献

- Larson, Richard, and Hiroko Yamakido(2001)*A New Form of Nominal Ellipsis in Japanese*. Stony brook University.
- Murasugi, K. (1991). Locative/Temporal vs. Reason/Manner Phrases. *Papers in English Linguistics and Literature* 33: 153-170. Kinjo Gakuin University.
- Rizzi, L. (1986) Null Objects in Italian and the Theory of *pro*. *Linguistic Inquiry* 17:501-557
- Watanabe, A. (1993) Agr-based Case Theory and its Interaction with the A-bar System. Doctoral dissertation, MIT.
- 特別認可法人情報処理振興事業協会 計算機用日本語辞書 IPAL
- 飛田良文、浅田秀子(1991) 『現代形容詞用法辞典』 東京：東京堂書店